

大学生における摂食障害傾向 —摂食障害診断質問紙EDE-Q 6.0を用いて—

Eating Disorder Examination Questionnaire (EDE-Q):
Norms for Japanese Undergraduate students

三井知代*

Tomoyo MITSUI

<要旨>

本研究はわが国の一般大学生男女を対象とし、摂食障害傾向を摂食障害診断質問紙EDE-Q 6.0によって明らかにすることを目的とするものである。4年制大学男女大学生988名（男子261名、女子727名）を対象に、EDE-Q 6.0を実施した。その結果、摂食障害傾向が高いとされるカットオフポイント以上の学生の割合は男子0.77%と女子1.65%であった。また、日本の女子大学生は体型・体重へのこだわりが、BMIが低いにもかかわらず、欧米の女子大学生よりも高い傾向が認められた。今後、文化・社会的側面から欧米人との比較、検討が必要であると思われる。

キーワード：男女大学生、摂食障害傾向、体型・体重へのこだわり、EDE-Q

1.はじめに

本研究は、わが国の一般大学生男女を対象とし、摂食障害傾向を明らかにすることにより、摂食障害（Eating Disorder; 以下EDと記す）の早期発見や予防に役立つ知見を得ることを目的とするものである。

EDは思春期・青年期に発症のピークを迎え、男子と比較すると女子の発症が圧倒的に多い。小牧ら（2012）が日本の男女中学生5977人（男子2969名、女子3008名）を対象として摂食障害診断質問紙EDE-Q 6.0（Eating Disorder Examination Questionnaire 6.0）（Fairburn and Beglin, 1994）日本語版を使用し実施した調査によると、臨床上有意な摂食障害傾向とされる頻度、つまり下位尺度の合計得点Global Scoreにおけるカットオフ値4点以上の頻度は、男子が0.2%、女子が1.9%、男女比は約1:10であった。これらの傾向が男女大学生においても同様であるのか、あるいはまた違った傾向が認められるのかについて、これまでほとんど調査が行われてこなかった。

大学生は、中学・高校生と比較して神経性過食症（Bulimia Nervosa; 以下BNと記す）の発症が増加する時期である。また、EDの診断基準を完全には満たさないが、過激なダイエット、むちゃ食い、体重減少を目的とした排出行動などの摂食行動異常を

呈するEDリスク群、つまりサブクリニカルな者が大学生の中に数多く存在するとされている。それゆえ、これらの一般大学生を対象とした摂食障害傾向の把握を目的とした実態調査を行い、日本の男女大学生の特徴を、諸外国の先行研究と比較することにより、詳細に検討する必要があると考える。

筆者はこれまで、日本の女子大学生における摂食行動異常の実態（三井, 2005）や体型・体重に関する意識調査（三井, 2006）を実施し、多くの女子大学生が強い「体重・体型不満」などのボディ・イメージの問題を抱えている実態を指摘し、さらに大学生を対象としたEDの予防や早期支援の重要性について述べてきた（三井, 2007, 2010a, 2010b）。加えて、筆者はEDE-Q 6.0を利用した日本の大学生における摂食行動異常についての実態と米国大学生との比較調査を行い、「客観的過食」の経験者の占める割合においては男女ともに日本の大学生がアメリカの大学生よりも高いことを示唆した（三井, 2012）。本研究は、上記の研究では報告されていなかったEDE-Q 6.0における、EDの精神病理の重症度を示す4下位尺度得点(22項目)に関する報告を行う。

* 神戸親和女子大学大学院心理臨床学専攻准教授

2.方法
(対象者)

近畿圏にある4年制大学7校において、2010年9月～2011年6月にかけて、講義時間を利用した集団方式で質問票による調査を実施した。最終的に分析対象となったのは男女大学生988名(男子261名、女子727名)であった。回収率は96.5%、有効回答率は92.6%であった。男女大学生の平均年齢と平均体格指数 (Body Mass Index;BMI) については、Table 1 に示す。平均BMI (SD) が、男子大学生が20.89 (3.03) kg/m²、女子大学生が20.46 (2.56) kg/m²であった。加えてBMIが17.5 kg/m²以下の割合は、男子大学生の5.7%、女子大学生の7.3%であった。

Table 1 対象男女大学生の人数、平均年齢、平均BMI

	男子大学生	女子大学生
人数(人)	261	727
平均年齢(歳)	19.15 (1.16)	19.31 (1.08)
平均 BMI (kg/m ²)	20.89 (3.03) ***	20.46 (2.56)

(): 標準偏差 ***: $p<.001$

(尺度)

対象者の摂食行動異常やED傾向を測定する尺度として、Fairburn & Beglin ら (1994) が開発したEDE-Q 6.0日本語版 (切池監訳, 2010) を使用した。EDE-Qは、近年ED傾向を検討する調査において諸外国において頻繁に使用されているED診断質問紙である。EDE-Q 6.0は摂食障害診断構造化面接EDE 16.0 (Eating Disorder Examination 16.0) を自記式質問票としたものである。本質問票は全28項目からなり、主に直前の4週間の状況について想起し、回答させるものである。EDE-Q 6.0は、EDの精神病理の重症度を示す4下位尺度得点 (22項目) と、摂食行動異常の頻度や日数についての情報 (6項目) が得られる。下位尺度は、「食事制限 (Restraint)」、「食事へのこだわり (Eating Concern)」、「体型へのこだわり (Shape Concern)」、「体重へのこだわり (Weight Concern)」の4下位尺度と合計得点グローバルスコアから構成される。EDE-Q 6.0の信頼性、妥当性については海外においては確認されている (Fairburn & Beglin, 1994; Mond, Hay, Rodgers, Owen, & Beumont, 2004)。

回答は、過去1カ月間における行動エピソードの

生起日数を数える項目においては、「毎日 (6点)」、「23—27日 (5点)」、「16—22日 (4点)」、「13—15日 (3点)」、「6—12日 (2点)」、「1—5日 (1点)」、「0日 (0点)」の7件法で回答させ、その他の項目では、「非常に (6点)」から「全くない (0点)」の7件法で回答を求めた。本研究においては、EDE-Qの総合得点であるグローバルスコアと4下位尺度得点について日本の男女大学生と海外先行研究における男女大学生のデータと比較した。

さらに、フェイスシートにおいて、被験者の年齢、身長、体重を記入させた。ED傾向の強い者を選別するためのカットオフポイントは、海外の先行研究に倣い、4.0とした。

(統計解析)

統計解析はSPSS14.0J for Windowsを使用した。尺度得点の比較には、対応のないt検定、カットオフポイント以上の者の割合の比較には、比率の差の検定を行った。また、質問内容を理解しやすいように切池監訳版のワーディングを一部改変した。

3.結果

(1) 男女大学生におけるED傾向の比較

Table 2 に日本人男女大学生におけるEDE-Qのグローバルスコアと4下位尺度の平均得点 (SD) とカットオフポイント以上の学生の割合を示す。下位尺度ごとに、平均値を下位尺度得点として算出した。

日本人男女大学生を比較すると、EDE-Qの平均得点は女子大学生の方が男子大学生よりも、グローバルスコアと4下位尺度全てにおいて有意に高いことが示された。特に、体型へのこだわり、体重へのこだわり尺度においては、ED傾向が高いと思われるカットオフポイント4点以上の学生の頻度が、女子大学生が男子大学生よりも有意に高いこと、加えてグローバルスコアにおけるカットオフポイント以上の者の頻度が男子0.77%と女子1.65%であり男女比は約1:2となった。

次に日本とアメリカの男子大学生 (N=404、Lavender, De Young, & Anderson, 2010) のEDE-Q得点とカットオフ値以上の学生の割合の比較を行った (Table 3)。その結果、グローバルスコア、4下位尺度全てとBMIにおいて、日本の男子大学生よりもアメリカの男子大学生の方が有意に得点が高かったが、カットオフポイント4点以上の頻度には、日米で有意差は認められなかった。

Table 2 日本男女大学生におけるEDE-Qの得点とカットオフ値以上の学生の割合

	日本 男子大学生 n=261	カット オフ 4 点 以上 (%)	日本 女子大学生 n=727	カット オフ 4 点 以上 (%)
グローバルスコア	0.60 (0.82)	0.77	1.51 (1.02) ***	1.65
食事制限	0.41 (0.87)	1.15	0.86 (1.1) ***	2.48
食事へのこだわり	0.27 (0.64)	0.77	0.58 (0.82) ***	0.83
体型へのこだわり	0.96 (1.20)	4.6	2.45 (1.52) ***	19.67***
体重へのこだわり	0.77 (1.15)	3.45	2.13 (1.41) ***	10.17***
平均年齢	19.15 (1.16)		19.32 (1.08)	
平均 BMI	20.89 (3.03) ***		20.46 (2.56)	

() : 標準偏差

*** : $p < .001$

さらに日本の女子大学生とアメリカの女子大学生 (N=723、Luce Cromther, & Pole, 2008) のEDE-Q 得点とカットオフ値以上の学生の割合の比較を行った (Table 4)。その結果、アメリカの女子大学生は、日本の女子大学生と比較すると、グローバルスコア、食事制限、食事へのこだわりが有意に高く、一方日本の女子大学生の方はBMIが有意に低いにも関わらず体型へのこだわり、体重へのこだわりがアメリカの女子大学生よりも有意に高かった。

カットオフポイント4点以上の学生の割合の比較では、グローバルスコアと食事制限はアメリカの女子大学生が高かったが、体型へのこだわり尺度におけるカットオフ 4 点以上の割合は、日本の女子大学生の方が有意に高いことが示された。

この傾向はオーストラリアの女子学生 (n=339、Mond & Chen, 2010) との比較においても同様の傾向が認められた (Table 5)。つまり、日本の女子大学生はBMIが有意に低いにもかかわらず体型へのこだわり、体重へのこだわり尺度においてオーストラリアの女子学生よりも有意に得点が高いことが認められた。

加えてスペインの女子大学生 (n=708 Villarroel, Penelo, Portell, & Raich, 2009) との比較を行うと、体型・体重へのこだわりが日本の女子大学生が有意に高かったことに加えて、グローバルスコアも日本人女子大学生が有意に高いことが示された (Table 6)。

一方、シンガポールの女子大学生 (N=164、

Mond & Chen, 2010) と日本の女子大学生を比較すると、日本の女子大学生の方が平均BMI が有意に高いにもかかわらず、シンガポールの女子大学生の方が食事へのこだわり尺度において有意に高い値を示していた (Table 7)。しかし、両群の間において下位尺度で有意差が認められたのは食事へのこだわり尺度のみであった。

4. 考察

本研究において、ED傾向を示すグローバルスコア 4 点以上の頻度は、日本の男子大学生の0.77%、女子大学生の1.65%であった。日本の男女中学生5977人を対象として行った小牧ら (2012) によるEDE-Q 6.0の調査研究においてはグローバルスコア4点以上の頻度は男子中学生が0.2%、女子中学生が1.9%であり、その男女比は約1:10と報告されている。日本の男女中学生におけるED傾向の頻度やその男女比は海外の成人における頻度やその男女比 (Keski-Rahkonen, Raevuori, & Hoek, 2008) と概ね同様である。本研究における男子大学生のグローバルスコア 4 点以上の頻度が、これらの先行研究よりも高い点については、女子大学生と比較して男子被験者数 (N=261) の少なさが結果の偏りを生じさせている可能性は否定できず、今後より大規模な調査による検討が必要と思われる。

また、日本の男女大学生の比較においては、女子大学生が男子大学生よりもすべての尺度得点において、有意に高く、かつ体型へのこだわり、体重への

Table 3 日米男子大学生におけるEDE-Qの平均得点とカットオフ値以上の学生の割合

	日本 男子大学生 n=261	カット オフ 4 点 以上 (%)	米国 男子大学生 ¹⁾ n=404	カット オフ 4 点 以上 (%)
グローバルスコア	0.60 (0.82)	0.77	1.09 (1.0) ***	1.7
食事制限	0.41 (0.87)	1.15	1.04 (1.19) ***	2.2
食事へのこだわり	0.27 (0.64)	0.77	0.43 (0.77) ***	1
体型へのこだわり	0.96 (1.20)	4.6	1.59 (1.38) ***	7.7
体重へのこだわり	0.77 (1.15)	3.45	1.29 (1.27) ***	3.7
平均年齢	19.15 (1.16)		19.02 (1.41)	
平均 BMI	20.89 (3.03)		21.29 (1.27) ***	

1) : Lavender et al. (2010)

() : 標準偏差 *** : $p < .001$

Table 4 日米女子大学生におけるEDE-Qの平均得点とカットオフ値以上の学生の割合

	日本 女子大学生 n=727	カットオフ 4 点以上 (%)	米国 女子大学生 ¹⁾ n=723	カットオフ 4 点以上 (%)
グローバルスコア	1.51 (1.02)	1.65	1.74 (1.30) ***	5.6 ***
食事制限	0.86 (1.1)	2.48	1.62 (1.54) ***	7.9 ***
食事へのこだわり	0.58 (0.82)	0.83	1.11 (1.11) ***	2.2
体型へのこだわり	2.45 (1.52) *	19.67*	2.27 (1.54)	14.8
体重へのこだわり	2.13 (1.41) *	10.17	1.97 (1.56)	10.2
平均年齢	19.32 (1.08)		18.7 (1.2)	
平均 BMI	20.46 (2.56)		22.6 (3.9) ***	

1) Luce et al. (2008)

() : 標準偏差 * : $p < .05$ *** : $p < .001$

Table 5 日本・オーストラリア女子大学生のEDE-Q平均得点の比較

	日本 女子大学生 (n=727)	オーストラリア 女子学生 ¹⁾ (n=339)
グローバルスコア	1.51 (1.02)	1.54 (1.30)
食事制限	0.86 (1.1)	1.27 (1.44) ***
食事へのこだわり	0.58 (0.82)	0.85 (1.09) ***
体型へのこだわり	2.45 (1.52) *	2.23 (1.66)
体重へのこだわり	2.13 (1.41) **	1.81 (1.57)
平均年齢	19.32 (1.08)	19.23 (0.75)
平均 BMI	20.46 (2.56)	22.79 (4.47) ***

1) Mond et al. (2010)

() : 標準偏差 * : $p < .05$ ** : $p < .01$ *** : $p < .001$

Table 6 日本・スペイン女子大学生のEDE-Q平均得点の比較

	日本 女子大学生 n=727	スペイン 女子大学生 ¹⁾ n=708
グローバルスコア	1.51 (1.02) ***	1.30 (1.19)
食事制限	0.86 (1.1)	1.29 (1.33) ***
食事へのこだわり	0.58 (0.82)	0.66 (0.97)
体型へのこだわり	2.45 (1.52) ***	1.75 (1.50)
体重へのこだわり	2.13 (1.41) ***	1.51 (1.41)
平均年齢	19.32 (1.08)	22.0 (2.7) ***
平均 BMI	20.46 (2.56)	—

1) Villarroel et al. (2009)

() : 標準偏差 *** : $p < .001$

Table 7 日本・シンガポール女子大学生のEDE-Q平均得点の比較

	日本 女子大学生 n=727	シンガポール 女子大学生 ¹⁾ n=164
グローバルスコア	1.51 (1.02)	1.57 (1.07)
食事制限	0.86 (1.1)	0.96 (1.07)
食事へのこだわり	0.58 (0.82)	1.06 (1.03) ***
体型へのこだわり	2.45 (1.52)	2.31 (1.44)
体重へのこだわり	2.13 (1.41)	1.96 (1.36)
平均年齢	19.32 (1.08) ***	18.68 (0.73)
平均 BMI	20.46 (2.56) ***	19.52 (2.55)

1) Mond et al. (2010)

(): 標準偏差 ***: $p < .001$

こだわりにおけるカットオフ値4点以上の頻度が、男子大学生よりも有意に高い結果を示していた。発症頻度の男女比から考えると当然の結果であるが、欧米諸国との比較においても日本の女子大学生の体型へのこだわり、体重へのこだわりへの強さは特筆すべきものであった。たとえば日米女子大学生の比較においては、平均BMI、グローバルスコア、食事制限、食事へのこだわりは、有意にアメリカの女子大学生の方が高い結果を示していたにも関わらず、体型へのこだわり、体重へのこだわりにおいては、日本の女子大学生の方が有意に高く、加えて体型へのこだわりにおけるカットオフ値以上の頻度も日本の女子大学生の方が高かった。日本の女子大学生の体型へのこだわり、体重へのこだわりへの強さ、つまり痩身へのこだわりは、オーストラリアやスペインの女子大学生との比較においても同様の結果が示され、日本の女子大学生のEDE-Qの結果の特長と言えるだろう。アメリカ・オーストラリアの女子大学生と比較してBMIが低いにも関わらず、日本の女子大学生が痩身にこだわる背景には、日本の社会の痩身志向、スリムであることが美しいといった価値観が社会に蔓延していることが考えられる。特に、若い女性が集う女子大学生集団においては、その傾向が高いことは想像に難くなく、よりスリムな体型へと痩身を競うような風潮が日本の女子大学生においてはあのではないだろうか。

しかし一方では、アジアのシンガポールの女子大学生との比較では、体型へのこだわり、体重へのこだわりにおいては日本の女子大学生との間では有意

差が認められなかった。体型・体重へのこだわりは今後、文化・社会的側面から欧米人やアジアの女子大学生との比較、検討が必要であると思われる。

いずれにしても、日本の女子大学生を対象としたEDE-Qの調査においては、この体型・体重へのこだわりは、日本のあるいはアジアの若い女性におけるボディ・イメージの問題を検討する際に重要な側面として考えねばならない点であり、ED予防的見地からも今後より一層の精査が必要になると考える。

最後に、本研究の今後の課題として、EDE-Q 6.0 日本語版の信頼性、妥当性の検討を行わねばならないだろう。特にEDE-Qの因子構造については本研究が準拠したFairburnらの原版とは違った因子構造の結果を示唆している先行研究もある。例えば、Hraboskyら(2008)は肥満手術の対象者のEDE-Qを調査した結果、「食事制限」「摂食異常」「外見へのとらわれ」「体型・体重の過大評価」の4因子構造であるとしている。また、Petersonら(2007)はBN患者を対象としたEDE-Q調査で4因子構造の結果を得ているものの、Fairburnらの原版とは違った因子構造を示し、3因子構造とした方が適合が良いことを示唆している。今後、我が国において、EDE-Qの因子構造を含めた妥当性、そして信頼性の検討を早急に行わねばならない。

加えて、EDE-Qは、臨床群の診断面接のために開発された構造化面接EDEを基に作成された質問紙であり、その経緯から健常群のみならず臨床群も調査対象としてその結果を比較・検討すること、またEDE-QとEDEの結果の異同を検討する必要もあると

考える。

<文献>

- Fairburn, C.G. and Beglin, S.J. 1994 Assessment of eating disorders: Interview or self-report questionnaire? *Int J Eat Disord*, 16:363-370.
- Fairburn, C. G. 2008 Cognitive Behavior Therapy and Eating Disorders. The Guilford Press New York, London.
(Fairburn, C. G. 切池信夫 (監訳) 2010. 摂食障害の認知行動療法 医学書院)
- Keski-Rahkonen, A., Raevuori, A. and Hoek, H.W. 2008 Epidemiology of eating disorders: an update. In: Wonderlich S., et al (Eds). Annual Review of Eating Disorders, Part2-2008. Oxford: Radcliffe Publishing; pp58-68.
- Hrabosky, J.I., White, M.A., Masheb, R.M., et al. 2008 Psychometric Evaluation of the Eating Disorder Examination-Questionnaire for Bariatric Surgery Candidates. *Obesity* 16:763-769.
- 厚生労働省科学研究費補助金障害者総合対策研究事業
児童・思春期摂食障害に関する基盤的調査研究 平成
21年度～平成23年度総合研究報告書 (研究代表者 小
牧元) 2012
- Lavender, J.M., De Young, K.P. and Anderson, D.A.
2010 Eating Disorder Examination Questionnaire (EDE-Q) : Norms for undergraduate men. *Eating Behaviors*, 11:119-121.
- Luce, K.H., Crowther, J.H. and Pole, M. 2008 Eating Disorder Examination Questionnaire (EDE-Q) : Norms for undergraduate women. *Int J Eat Disord*, 41:273-276.
- 三井知代 2005 摂食行動障害を有する女子大学生の心理
的特性—パーソナリティ特性, 自尊感情, アイデンティ
ティ達成感覚について—, 心身医学, 45:43-51.
- 三井知代 2006 女子大学生における摂食障害予防介入プ
ログラムの効果—7ヶ月後までの追跡調査—, 思春期
学 24 : 581-589.
- 三井知代, 生野照子 2007 女子大学キャンパスにおける摂
食障害予防活動. 日心療内誌 11 : 250-254.
- 三井知代 2010a 摂食障害の予防活動 生野照子, 切池信夫
(編) こころの臨床アラカルト, pp.399-403, 星和書店.
- 三井知代 2010b 大学における摂食障害への取り組み 西
園マーハ文 (編) 専門医のための精神科臨床リュミエー
ル28 摂食障害の治療, pp.139-148, 中山書店.
- 三井知代 2012 日本の大学生における摂食行動異常 神
戸親和女子大学大学院研究紀要 第8巻 : 77-82.
- Mond, J.M., Hay, P.J., Rodgers, B., Owen C, Beumont
P.J.V. 2004 Validity of the Eating Disorder
Examination Questionnaire (EDE-Q) in screening
for eating disorders in community samples. *Behav
Res Ther*. 42:551-567.
- Mond, J.M. and Chen, A. 2010 Eating disordered
behavior in Australian and Singaporean women:
A comparative study. *Int J Eat Disord* 43:717-
723.
- Peterson, C.B., Crosby, R.D., Wonderlich, S.A.,
Joiner, T., Crow, S.J., et al. 2007 Psychometric
Properties of the Eating Disorder Examination-
Questionnaire: Factor Structure and Internal
Consistency. *Int J Eat Disord*, 40:386-389.
- Villarroel, A.M., Penelo, E., Portell, M., Raich,
R.M. 2009 Screening for eating disorders in
undergraduate women: norms and validity of the
Spanish version of the Eating Disorder
Examination Questionnaire (EDE-Q). *J
Psychopathol Behav Assess*. 33:121-128.